

リンク発見ゲームの諸相

—「記号が存在する」というフィクションを超えて—*

萩澤大輝・氏家啓吾

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp keigo5525@gmail.com

キーワード： 認知言語学 使用基盤モデル 言語知識 記号 規範性
リンク発見ゲーム 野良バリエント

要旨

言語や言語記号はしばしば、世界のなかに客観的に存在するモノであるかのように捉えられる。本論文は、そうしたモノ化の幻想から距離を置き、使用基盤モデルの観点から言語知識の秩序を形成する活動のあり方を探る。記号やその「体系」と思えるものの背後には、言語使用者たちが経験の中に類似性・関連性などのつながりを見いだしていく過程、すなわち「リンク発見ゲーム」が存在する。この活動は、記号の認識に関する話者間のばらつきを生み出すような個別的な実践でありながら同時に慣習性・規範性に根ざしたものであること、そして、いくつかの要因によってモノ化の幻想が生まれ、それによりこの活動の存在が覆い隠されていることを主張する。

1. はじめに

「日本語には「箸」という語がある」とか、「computer は compute と -er という 2 つの要素からできている」といった語り方はごく当たり前のものとして受け入れられている。だが、ここに何か問題が隠れてはいないだろうか。実はこのような表現には、言語や言語記号をモノであるかのように——世界に客観的に存在する、明瞭な輪郭を持った対象のように——捉える見方が反映されている。便利ではあるとしても、これは言語使用者の心という探究対象の実態を正確に表したものとは言えない。いわばフィクションである。本論文では、記号をモノ化するフィクションから距離を置き、言語使用者たちの根源的でありそれゆえ見えにくい「活動」の実態に目を向ける。

記号のモノ化は、大きく分けて 2 つの側面からなる¹。一つは、言語記号を物体であるかのよ

* この論文は、日本英語学会第 39 回大会（2021 年 11 月 13 日）でのワークショップ「認知文法の基礎研究」における口頭発表「「コト」としての記号：認知文法から見た形態素」の一部を発展させたものである。ワークショップメンバーの平沢慎也、佐藤らな、田中太一の各氏、および原稿にコメントをくださった多くの方々に感謝申し上げます。

¹ 本稿でいう「記号」とは、形式と意味との結びつき一般のことである。いわゆる語や形態素だけでなく、イデオムや文法的構文、新規の言語表現も含む広い意味で用いている。ただし、本稿はその中でも特に、いわゆる語と形態素を扱う。これらに関して一般の言語使用者および言語研究者によるモノ化の傾向がとりわけ顕著に見られるからである。

うに見立て、さらに複合的な言語表現を物体が複数組み合わされた物体に見立てることである。これは Langacker がブロックの比喩 (building-block metaphor) と呼ぶものである。この比喩によって、外部からはっきり区切られていること (離散性) や同一性を維持しつつ複数の環境に現れること (永続性)、そして複合的な全体の性質が部分から予測可能であること (合成性) といったブロックのような物体が持つ特徴が、言語記号にも当てはまると想定されてしまう (詳しくは Ujiié and Hagiwara (in preparation) 参照)。そしてもう一つは、言語記号を言語使用者から独立した客観的な実体であるかのように見る捉え方 (客体化) である。これにより、それぞれの言語使用者が (意識的・無意識的な) 活動によって言語記号を成り立たせていることや、使用者ごとの言語知識の差異が見過ごされる。さらに、日本語や英語、淡路島方言といった記号の体系としての個別言語・方言も、客観的な存在物であるかのように捉えられてしまう。

具体的な例をもとに考えてみよう。「ビー玉」という語にいくつの形態素が含まれているかという問題に関して、「玉」を形態素とみなすと「ビー」という意味のはっきりしない形式が残ってしまうから、全体を未分析のままにするべきだという考え方がある (影山 2005)。ここには、上で述べた言語記号のモノ化の2側面がいずれも観察される。第一に、「玉」を形態素として取り出すなら「ビー」も形態素として取り出さなければならない (つまり「あまり」が出てはならない) と考えるのは、形態素を物体に見立て、語の形成を物体の組み立てのように捉えているからである。そして第二に、「ビー」の「正当」な語源 (ビードロ) を知っている人や、ABCのBだと思っている人、よくわからないが意味があるのだろうと感じている人など、実際には様々な認識の話者がいるはずである。そうした言語使用者の認識を考慮せずに「この語はこれこれの形態素からできている」と主張するのは、語とその構造があたかも客観的に存在するかのように捉えているからであろう。その虚構を当然のものと思い込むと、各話者が部分的にであれ記号的要素を見いだしているという実態が覆い隠されてしまう。

こうは考えられないだろうか。客観的に存在するかに見える言語記号の「体系」の背後に、言語使用者たちが経験の中に類似性・関連性などのつながりを見いだしていくプロセスがあるのだと。このプロセスを萩澤 (2020) では「リンク発見ゲーム」と呼んだ。本論文の目的は、個々の話者が経験の中に秩序を見いだしつつ知識を形成する活動について考察することを通して、上述したモノ化、特に第二の側面として述べた客体化がどのように成立しているのかを明らかにすることである。

そのための議論は以下のように進行する。まず2節で、Langacker (2000, 2019 ほか) の使用基盤モデルを参考にしながら、記号をモノではなくコトとして捉えることを提案する。3節ではコト的記号観を推し進めた萩澤 (2020) に基づき、個々の言語使用者が経験の中に秩序を見いだしていく過程をリンク発見ゲームとして捉える見方を提案する。4節ではその内実を理解する手がかりとして、「野良バリエント」(「電子レンジ」を「レンシレンジ」と認識するような逸脱) の事例を紹介する。続く5節では、個々の話者によるリンク発見過程が言語記号の本質であるなら、なぜ共同体の成員の言語知識がコミュニケーションに支障のない程度に似通っているのかという問いに取り組む。以上の議論を踏まえ、6節では、記号をモノ化してしまう言

語使用者の傾向を招く要因を検討した上で、言語研究者にも見られるバイアスを乗り越える道筋を示す。7節では全体を総括し、結びとする。

2. 使用基盤モデルから見た言語の実像

本論文では、言語研究においては、記号をモノ化する比喩から脱して実態に即した動的な見方を取る必要があると主張する。たしかに、メタファーは理論的思考にとって不可欠な役割を果たしている面がある。言語学においても比喩が重要な働きを持つことは間違いない。しかし、研究者が自分たちの用いている比喩を「真に受けてしまう」ことにより、様々な弊害が生じると Langacker は指摘する²。

メタファーは、きわめて自然であるだけに、透明化してしまうことが多い。それゆえ標的^{ターゲット}に対する隠喩的解釈を、標的が実際に持つ性質だと誤解してしまう恐れがある。どれほど示唆的であろうと、またどれほど標的領域の理解に有効であろうと、メタファーから導かれたことは、あくまでそれとして認識しておく必要がある。実際には標的に当てはまらない可能性もあるのだから。

(Langacker 2016: 12)

例えば、ある現象が「語彙部門」と「文法部門」のどちらで扱われるかといった問題設定は、言語の知識を明確に区切られた複数のパーツからなる物体に見立てるメタファーを真に受けてしまったために生じた疑似問題の一例と見ることができる (Langacker 2008: 216, 2016: 11)³。

では、言語研究における「標的」である言語の実態とはどのようなものだろうか。

確かな現実とはいえば、ただ人々が話しているということであって、その話し方がよく似ていたりあまり似ていなかったりするというだけだ。話すことは複合的な活動である。そのため言語は、つきつめれば動的なものとして (つまり、人が持っているものではなくすることとして) 捉える必要がある。

(Langacker 2008: 216; 強調は原文)

比喩を取り払った言語の実態は、人々の動的な活動であると Langacker は述べる。そのようなものとして言語を受け止めたとき、語や形態素といった要素に適切な位置づけを与えることは可能なのだろうか。使用基盤モデル (Langacker 2000, 2019 ほか) では、言語知識を構成する単位がすべて実際の言語使用の経験、すなわち使用事象 (usage event) から立ち上がると想定する。使用事象は、発話そのものだけでなく、発話の現場でそれを理解する話し手・聞き手の心

² 以下、本稿における英語からの直接引用はすべて筆者による訳である。

³ 隠喩的理解を完全に廃すべきだと主張しているわけではない。Langacker (2016: 15) は、メタファーの使用が人間の避けられない性向の一部であることを踏まえて、あくまでメタファーだと意識しながら使うこと、複数組み合わせ使ってみることで、そして標的のメタファーによらない理解に照らして適切さを検証していくことを提案している。

的活動全体をも含むものである。この立場からは、語や形態素といった要素もダイナミックな認知的処理活動として存在すると考えられる。

言語構造は本質的に動的なものであり、様々な次元、様々な時間スケールにおいて同時に行われる認知的処理活動である。(形態素のような) 最小かつ固定的な構造でさえも、それは出来事——ひとまとまりの単位として喚起・実行される認知的処理のルーチン——なのである。
(Langacker 2019: 346; 強調は原文)

使用事象のうちの何らかの共通性が繰り返し経験されれば、それは主体の心内に様々な程度に定着し、容易に処理されるようになる。つまり、ここでいう「単位」は、上で述べた意味での使用事象の経験から切り離されたものではなく、使用事象の一部の側面が定着した活動パターンなのである。以上を踏まえると、語や形態素などの言語記号はこの意味での単位の一種であるため、モノではなくいわば「コト」だと言える。

では、話者が使用事象の経験の中から「言語体系」と比喩的に呼ばれうるような秩序を心内に形成していくプロセスの詳細はどのようなものだろうか。以下ではこの問題を考察する。

3. リンク発見ゲーム

3.1. リンク発見ゲームとは

萩澤(2020)では、個々の言語使用者に着目し、心的な秩序づくり、すなわち体制化(organization)のプロセスを、言語使用者たちが素朴理論を用いて類似性や関連性といった「リンク」⁴を発見していくゲームとして捉えることを提案した⁵。この考え方によれば、個々の記号の存在そのものが、リンク発見という活動なしには成立しない⁶。言語使用者が経験の中に(無意識あるいは意識的に)つながりを見だしていく絶え間ないプロセスがまず存在し、そうしたリンク発見の最大公約数的な結果をモノに見立てた結果が「これこれの語がある」という語り方なのである。例えばある子供が、ある種の器(湯飲み)に注意が向けられている状態で [junomi] という音の連なりを含んだ複数の発話を経験し、そこに概念上・音韻上の類似性のリンクを発見する。同様のリンク発見が共同体のある割合の話者の間で一定程度の強度で生じるとき、「湯飲み」

⁴ 「リンク」という用語もやはり一種のモノ化であり、場合によっては有害になりうることに注意しなければならない。

⁵ この用語は Wittgenstein (1953/2009) によるゲーム (Spiel) に関する議論に影響を受けたものであり、体制化のプロセスが柔軟で多様性を持つ実践であることを強調する意図がある。おおむね規則が備わっている活動も隅々まで規則に支配されているわけではなく(『哲学探究』68節)、またそうした活動の種類は多岐にわたる(同23節)。経験の中に言語的対象を見出していく過程はまさにこのような性質を持っている。

⁶ ここでいうリンクの発見は、認知文法のカテゴリー化 (categorization) に相当する。認知文法で用いられる術語としてのカテゴリー化は、ある心的構造をもとに何らかの経験の側面を理解することを表す、極めて広い意味の用語である。例えば、イチローをイチローその人と認識することや、目の前の箸を箸として認識することもこの意味でのカテゴリー化の一例である。詳細は Langacker (2005: 115–117, 2008: 228–230) を参照されたい。

という語が存在するという語り方がされるようになる。

このように記号の存在がその背後にあるリンク発見のプロセスに依存した抽象化の産物であるということは、セクリーション (secretion) と呼ばれる過程による形態素の創発の例を考えるとより明確になる (cf. Callies 2016)。typo (誤植) という語の中の -o の部分は特定の意味を担う形態素だと言えるかという問題を考えてみよう。現代英語では、この語をもとにした表現として、(打ち間違いでなく) 勘違いを意味する thinko、クリックミス意味する clicko、スキャン時の文字認識のミス意味する scanno といった事例が散発的に観察される。これらが使われるのを初めて聞いた話者がその意味を適切に理解することを可能にするのは、モデルとなる typo という語との関連、すなわち「リンク」の発見である。例えば、scanno という語に初めて触れた話者は、文脈上の手がかりなどから typo とのリンクを発見し、それが〈スキャン時の文字認識のミス〉を表す語だと理解するだろう (詳しくは萩澤 2019 を参照)。

この時、scanno が typo と関連していることに気づいてはいても、-o という部分に〈ミス〉の意味を割り当てているとは限らない。typo においても、この段階ではまだ -o が〈ミス〉の意味を担っていると理解されるとは限らない。-o が〈ミス〉という意味をもつ記号であるという話者の感覚は、type: typo、think: thinko、scan: scanno... のように、リンクを見出された各事例の関係が体系的に整理されたときにはじめて明確に生じると思われる。そして、多数の話者の間でそのような意味の割り当てが生じた場合に、観察者が「〈ミス〉という意味をもつ -o という記号が英語に存在する」というモノ的な語り方をする余地が出てくる⁷。この例から、個々の記号の存在そのものが、事例間にリンクを見いだす過程に決定的に依存していることがわかる。

3.2. リンク発見と「記号の組み合わせ」

いま述べたことは、このような新規事例だけでなく確立した形態素とされる例にも当てはまる。例えば、「あたたかみ」に名詞化接尾辞「み」が含まれているという語り方は、話者たちがこの語と多数の他の事例(「厚み」「重み」「苦み」など)との間に部分的な共通性のリンクを見出しているという事実依存している。「あたたかみ」は「あたたかい」に「み」が付加されてできている」というような言葉づかいは、記号をモノに見立て、言語表現の形成をモノの組み立てとして捉えた比喩なのである。

ここで「み」が「確立した形態素」であるというのは、事例間の共通性のリンクがそれ自体として多数の話者の心内に定着しているということである。このため、これを [(形容詞) -み] という構文スキーマとして表すこともできる。確立した形態素といっても自己完結的な要素ではなく、「厚み」「重み」などの具体事例間の共通性が定着したものである以上、「み」という形態素があると述べることと、[(形容詞) -み] という構文スキーマがあると述べることは実質

⁷ この語形成については、語基が (scan や click のように) type とある程度似た意味の語でなければならない点や、一音節の語にほぼ限られる点など、typo という特定の語に依存した性質が見られる。このことから、多くの話者にとっては typo という一事例をもとに理解されているのだらうと推測され、十分に抽象化が進んで確立した形態素 (あるいは構文スキーマ) となっていないと思われる (萩澤 2019)。

的に同じことなのである (cf. Langacker 2019: 356)。scanno のようなアナロジー的語形成の事例と「あたたかみ」の事例の違いは、前者が特定の一つあるいは少数の語との関連で理解されるのに対して、後者は多数の事例の共通性との関連で理解されるという点にすぎない。

Langacker (2009: 235) は「統合的 (syntagmatic) 関係と系列的 (paradigmatic) 関係は重なりあっており、往々にして区別できない」と常識的見解に反する指摘をしている。この主張も、「あたたかい」と「み」を統合するというのが、構文スキーマ [(形容詞) -み] に含まれるスキーマ的形容詞の諸事例 (すなわち「厚い」「重い」「苦い」…といった系列) の一員として「あたたかい」をカテゴリー化することと等価であることを踏まえれば、説得力を持つものとなる。「要素を組み合わせて複合的な表現を作る」と表現される過程の背後には、必ず事例間のリンクを発見する活動が存在しているのである。

以上のように、リンク発見ゲームこそが話者たちの営みの実態で、記号をモノ的に語る言葉はそのプロセスの表層的な結果だけを切り出したものなのである。辞書の項目に象徴されるような公に存在を認められたモノとしての記号は、巨大な氷山の一角にすぎない。したがって、心の探究としての言語研究は、モノ化された記号を自明視するのではなく、実際のプロセスに注目すべきであろう。

3.3. リンク発見の手がかりとしての言語表現

リンクの発見という考え方は、実際のコミュニケーションの中での言語使用の分析にも役立つ。午前中の待ち合わせに遅刻した人に対して、その場の思いつきで「おそよう」と挨拶したとしよう。これは言うまでもなく「おはよう」および「遅い」とのリンク発見に基づいたものである。話し手は、こうしたリンクを発見すると同時に、聞き手にも、聞き手自身の心内に定着した記号「おはよう」を活性化させ、「早い」と対比される「遅い」との関連をその場で発見させようとしている。「おそよう」という言語表現はリンク発見の手がかりとして提示されているのである。形式上は「早い」の意味を担う部分が「遅い」に置き換えられているわけではないという点も興味深い (厳密に対応させるなら「おおそう」となるはずである)。対応が不完全であってもリンクが発見されれば新語形成は成功しうる。このことは、各要素が持つ定まった意味の合成から全体の意味が得られるというブロックの比喻を退け、コト的記号観を取れば、ごく自然なこととして理解される。

実はこうした創造的な例でなくとも、言語表現の使用は一般にリンク発見の手がかりを提示することであると捉えられる。「箸」という語を使って箸を表すような何の変哲もない発話においても、話し手は聞き手に、その発話を聞き手自身の知っている記号「箸」と結びつけるよう促していると言える。いわば、言語の使用はリンク発見させゲームでもあるのである。

次の例も使用の現場におけるリンク発見の重要性を物語っている。次の2つの表現には同じ「コロナ禍」という表現が使われているが、意味がわずかに異なっている。

- (1) a. コロナ禍のなか異例の選挙戦 (読売新聞オンライン 2020年7月4日)
 b. コロナ禍での五輪開催 (朝日新聞デジタル 2021年8月21日)

(1a) での「コロナ禍」の意味が「新型コロナウイルスによる災禍」と言い換えられるものだとすれば、(1b) での意味は「新型コロナウイルスによる災禍のなか」に相当するものである。(1a) の用法は部分の意味を足し合わせる発想によっても理解可能であるが、(1b) はそうではない。なぜなら、「禍」が固定的に〈災禍〉の意味を表すと考えるならば、「?大災害での五輪開催」が(大災害の状況下での五輪開催という解釈では) やや不自然であるのと同じように、(1b) も不自然になってしまうはずだからである。この現象を整合的に理解するためには、リンクを発見したりさせたりする活動として言語使用を捉えることが必要となる。(1b) の「コロナ禍」の「か」には、〈災禍〉を表す「禍」とのリンクと同時に、「状況下」の「下」とのリンクも見いだされているのだと思われる。ことによると、「コロナ禍」と「この中」という表現との間にリンクが感じ取られていることもこの例を成り立たせるさらなる要因となっているかもしれない。ブロックの比喩のもとでは、「か」が〈災禍〉の意味を担っているならば同時に〈下〉の意味を担うことはできない(ブロックは相互に浸透して二重になったりしないのだから)。それに対して、言語表現がリンク発見の手がかりであるという見方には、このような実際の言語使用においてしばしば観察される「重なり」を適切に捉える柔軟性があるのである。

3.4. 秩序形成を導くメカニズム

以上で見てきたように、ある記号が存在するか、記号の体系としての言語が存在すると言いたくなるのは、絶え間ないリンク発見ゲームにおいて結果的に一定規模の秩序が生じている時である。例えば、「あたたかみ」「厚み」「重み」などの間に多数の話者が共通性のリンクを見いだすことによってはじめて「み」という形態素(あるいは[(形容詞)-み]という構文スキーマ)があるとみなされる。では、その秩序の形成にはどのようなメカニズムが働いているのだろうか。その主要な仕組みとして、リンクの発見と抑制のせめぎ合いによる「体系化」と、全体が繰り返されることにより部分のリンクがすり減る「減衰」の2つを挙げることができる。

まず、言語に限らず経験を体系化しようとする一般的な傾向がある。言語記号の場合、形式と意味の対応を一貫したものにすることが体系性の重要な側面である。たとえば、「イタリア人」「中国人」「ネパール人」の中に共通点を見いだすことで、各表現が合成的に理解可能になり、体系性が高まるだろう。この体系性への指向の一面として、あらゆる対象に関してとにかく多数のリンクを発見しようとする力がたえず働いていると考えられる(この点については Benczes 2019 も参照)。複数の発話の経験から記号「箸」を習得する過程も、また scanno を typo と結びつけることも、このリンク発見の傾向が存在することによって可能になっている。それだけでなく、例えばオランダにスケベニンゲンという町があると聞いて思わずニヤリしてしまう現象も、そこに否応なく日本語の表現とのリンクを発見してしまうために生じるのである。一方で、リンクの過剰な発見はむしろ体系性を損なう恐れがある。そのため、共通点が感じ取れる

にもかかわらず、リンクが抑制されることも生じる。例えば「スイカ」には形式上「イカ」という部分が含まれているが、十本足の軟体動物とのリンクを発見している話者はほとんどいないだろう。仮に音声的類似からリンクを見いだしたとしても、あまりに意味が異なりリンクを利用しようがないため抑制されると考えられる。もし強く関連づけると体系性が損なわれてしまう（例えば「イカ」が奇妙な多義性を帯びてしまう）⁸。このように多くのリンクを発見しようとする傾向と、全体を一貫させるために一部のリンクを抑制しようとする傾向のせめぎ合いによって知識が体系化されていく。

なお、この体系化が極限まで押し進められた場合「ブロックの比喻」が成り立ちやすい状態になるが、実際の話者の知識は完全に体系的であるわけではない。具体的・実質的なリンクは発見・利用されやすいのに対し、抽象的なリンクは発見・利用されにくいという点に注意が必要である。言語学者が見つかることのできる規則性の一部は、あまりに抽象的で、話者によって発見・利用されていない可能性がある。例えば、「住まう」「語らう」「向かう」などにみられる「アウ」という共通性を発見していない話者は多いと思われる。

また、一回一回の言語使用（産出・理解）の経験は、ほんの少しであれ、必ず言語知識に影響を与える。その一例が全体の定着に伴う部分のリンクの減衰である。ある記号の使用を何度も行い、対応する認知的処理が繰り返されて定着（entrenchment）が進行した場合、はじめは見いだされていた部分のリンクが次第に減衰していく。「あつというま」という表現を「あつ」や「言う」といった部分のリンクを手がかりに習得した人であっても、高頻度であるために全体が定着し、それに伴って部分を意識する必要がなくなって、当初発見したリンクが薄れていくだろう。認知文法ではこの現象を分析可能性の低下（loss of analyzability）と呼び、言語変化の一つの要因として重要視している（氏家・萩澤 2019 も参照）。リンクの自然な減衰による知識の変化は、話者の知識を完全に体系的なものではないものとする一因である。以上の2つが、リンク発見を通じた言語知識の秩序形成を導くメカニズムの一部となっている（これに加えて、言語の規範性も考慮する必要があることを5節で述べる）。

4. 野良バリエント

言語使用者一人ひとりのリンク発見ゲームの結果である言語記号は、世界に客観的に存在する実体として捉えられる傾向がある。この「客体化」の大きな弊害の一つは、言語使用者ごとのリンク発見の個性が見えなくなってしまう点である。実際の言語知識は手さぐりのリンク発見の結果であるため、話者間のばらつきが大きい部分も当然ある。そのような不一致のケースを観察することで、リンク発見のプロセスを解明する重要な手がかりを得ることができる。

⁸ このような形式面だけの共通性は、普段は気づかないが注意を向けるきっかけがあれば気づくことができるような形で言語知識の中に存在する。例えば、なぞなぞや駄洒落、ラップなどに触れることで意識していなかった類似性に注意が向けられて気づくことがある。「醍醐味」と「粗大ゴミ」での押韻はその一例である。なお、こうした遊戯的な言語使用は、命題を表現するために語を合成的に組み合わせる文を作るといった言語使用とは著しく異なるが、いずれもリンク発見ゲームの射程に含まれる。

この節では、「野良バリエント」とでも呼ぶべき言語知識の不一致の例を見る。

4.1. 意識していない形式の不一致

例えば、ウェブ上には「電子レンジ」という語が「レンシレンジ」と表記されている例が多数観察される（三條 2015: 106）。この多くは単なる表記のミスではなく、話者間の心的表示の違いを反映したものと見るべきだろう。つまり、一部の日本語話者は「電子」とのリンクを発見せず「レンシ+レンジ」として認識しているのだと思われる⁹。このように、ある語の規範とされる形式とは異なっているが、その逸脱が当の話者に意識されていないようなバリエントのことを、「(「さみしい」と「さびしい」のように広く認識されているバリエントと対比して) 野良バリエントと呼ぶことにしよう。三條 (2015) はウェブ上から収集した野良バリエントの例を多数提示している。ごく一部の例を以下に挙げる（萩澤 2020 も参照）。

- | | | |
|-----------------|--------------|----------------|
| (2) 考え深い (感慨深い) | 一色単 (一緒くた) | 責任転換 (責任転嫁) |
| ヘキヘキする (辟易する) | とっさ的に (発作的に) | 歓喜あまって (感極まって) |
| エゴひいき (えこひいき) | 朝っぱな (朝っぱら) | 物議をかます (物議を醸す) |

これらの例からは、各話者が出会った表現を自らの知っている語との関連を見いだすことによって理解していることがうかがえる。すなわち、未知の表現を、音声的に似通っていて意味的にも関連が感じられる、自分に馴染みのある記号と結びつけようとする実践がある。強調しておきたいのは、そのような手さぐりのリンク発見の実践が野良バリエントだけでなく言語知識の全体を成り立たせているという点である。同じ一つのプロセスが、ある時には集団の規範に沿った知識を生み出し、ある時には規範から逸脱した記号を生み出す。さらに言えば、一人ひとりのリンク発見プロセスは現実にはきわめて多様であって、たまたま集団の中で一致度が高い部分を人は「言語」と呼んで実体化しているという見方も可能だろう。

言語研究者に限らず、言語について反省的に思考するとき、辞書に象徴されるような「公式」の語の一覧が存在すると想定してしまう傾向がある。これを「辞書バイアス」と呼ぶことができるだろう。このバイアスによって (2) のような野良バリエントは、言語知識の実態の一部であるにもかかわらず、存在しないことにされてしまう。

野良バリエントが見えなくなってしまうことには、様々な要因が働いていると考えられる。一つには、これらは多数派（あるいは威信・権力を持つ人々）の視点から「誤り」とみなされるため、校閲などの修正プロセスによって、出版物に現れることがめったにない¹⁰。ブログや

⁹ 「レンシ」の部分か担う意味は本人にとっても不明であると思われるが、詳細を棚上げした状態で部分に切り分けている可能性は十分ある。こうした現象はいわゆるクランベリー形態素やその他数多くの語（例えば「AO入試」）に関しても認められる（萩澤 2018）。

¹⁰ 筆者の観察では規範的な「デーモンニッシュ」に対して「デーモン」とのリンクを強く意識した「デーモンニッシュ」という野良バリエントが散発的に観察されるが、こうした微妙なバリエントであれば校閲の目をすり抜

SNS が普及したことで、校閲を経ない書かれた言葉を観察する機会が増えたからこそ三條 (2015) のような成果が可能になったわけである。また、ある時点では非標準的な分析をしていた話者も、「正しい」表記に触れると、規範意識から自らの知識を修正するだろう。例えば、「感慨深い」という語に最初に触れた時に「考え」と結びつけて「考え深い」と分析する話者がいたとしても、「感慨深い」の表記に触れればその後そちらに合わせようとする。さらに、言語研究者は大多数が高等教育を受けているという事情もあって、規範に近い言語知識を持っている人が多いと思われる。そのせいで「電子レンジ」を「レンジ」と認識している話者の存在に想像が及びにくいのではないかと推測される。以上のような理由によって、この現象は言語研究において注目されることが非常にまれであったと言える。しかし、水面下で行われている手さぐりのリンク発見ゲームの様子を窺い知ることができるという点で重要な現象である。

なお、こうした例を「バリエント」と呼ぶことは、(例えば「考え深い」が「感慨深い」という語の一つの変異形であるというふうに) それが同じ一つの語であるという認識を前提とした語り方である。「同じ語」という認定もリンク発見によってはじめて可能になる。もしある話者から見て (2) の表現が誤りだと感じられるとしたら、その人は何らかのレベルで規範的表現との同一性を感じ取っていることになる。別語であるという意識があればその用法は相互に干渉しないはずだからである (例えばクマを意味する bear があるからといって、それは「耐える」という意味で bear を使用することを妨げない)。ここでは多くの話者がこの意味での同一性を感じとっていると想定し、便宜的にバリエントという言葉を使っているにすぎない。実際、「感慨深い」と「考え深い」を別の表現として両方使い続ける話者がいてもおかしくないと思われるが¹¹、その場合、バリエントと呼ぶのは厳密には適切ではない。

4.2. 形式に表れないリンク発見の不一致

上で見てきたのは表記の不一致によって認識の差異が明るみに出た例であるが、表記や音形が規範から外れていなかったとしても心的表示が異なっていることはありうる。そうした例を含めて、野良バリエントを「意識されづらい心的表示のぼらつき」という広い意味で用いるならば、この現象は話者の言語知識のありとあらゆる箇所に行き渡っているはずである。例えば「いさぎよい」という語の中に「良い」とのリンクを見出している人もそうでない人もいると思われる¹²。また、鶏肉の「ささみ」は本来的には「笹」と「身」に関連づけられるが、筆者がこの関連を知ったのはごく最近のことで、それ以前は分析意識が働いていなかった¹³。このよう

けて公刊されることがある。

¹¹ 「考え深い」という表現を使い続けた場合、他の話者から「感慨深い」の誤りだと判断されることもありうる。このような現象を萩澤 (2021) では独立発明と融合という概念で分析した。

¹² 野中 (2011) は「いさぎ悪い」という表現が観察されることを指摘し、一部の話者が「いさぎよい」に「良い」を見いだしているために生じた例であると分析している。

¹³ こうした事例を扱うにあたって形態論 (morphology) と語源論 (etymology) の区別が導入されることがある。たしかに、語の持つ情報のうちで現代の話者の知識の一部となっているものとそうでないものを区別することは有益である。しかし、語源論に属すると言われる情報を話者が意識していることもあれば (例: Monday を

なリンク発見の隠れた不一致も、広義の野良バリエントに含めることができる。

広い意味での野良バリエントの事例は、いくつかに分類できる。まず、記号の一部に別の記号とのリンクを見いだすかどうかの違いが挙げられる。上で見た「ささみ」の例（「笹」「身」を見いだすかどうか）がこれにあたる。「あつというま」に「あつ」や「言う」が含まれているとどの程度意識しているかなども話者によって異なるだろう。これは上で述べた「分析可能性」の話者ごとの違いに相当する。

また、どの記号と結びつけるかの不一致もある。リンクを見いだした場合でも、ある箇所にもどの記号とのリンクを見いだすかが異なりうるのである。例えば、「まちにまった」の一部を「町」と結びつける例などが挙げられる。なお、特定の記号と関連づけられなくとも「そういう記号があるのだろう」という形で部分を認識することもある。例えば「きなくさい」について、漠然と「よく分からないが、「きな」という部分が含まれているな」とか「「きな」という物があるのだろう」などと思っている話者がいるかもしれない。この種の例は宮島（1973）に豊富に挙げられている（注9も参照）。

加えて、語の構造の認識はリンク発見と表裏一体であるから、何と結びつけるかによってどこで区切るかが変わる場合もある。例えば、就寝時に着用する衣服を表す語「ねまき」には「寝巻き」の表記と「寝間着」の表記が見られるが、前者は「寝+巻き」、後者は「寝間+着」とグルーピングしていることになる。

さらに、意味の異なる形式を結びつけるかどうかの違いもある。「泣く」と「鳴く」は同じ音形を持つが、日本語話者の中には両者を結びつけている人と結びつけていない人がいるだろう。前者にとっては1つの語の多義性であり、後者にとっては同音異義関係にある別の語であることになる（もちろん多義と同音異義は連続しているため、中間的なケースもあるだろう）。これもリンク発見の隠れた不一致の一例である。

以上で記述した野良バリエントの種類を表にまとめておこう。なお、この表は例の整理のために供する便宜的なものであって、網羅を意図したものではない。また、各項目が相互排他的でないため一つの例が複数の分類に当てはまりうる。

表1 野良バリエントの分類

種類	例
意識していない形式の不一致	「電子レンジ」vs. 「レンシレンジ」
表現の一部に別の記号とのリンクを見いだすか否か	「ささみ」を「笹-身」と分析するか否か
表現の一部をどの記号と結びつけるか	「待ちに待った」vs. 「町に待った」
どの記号と結びつけるかに応じた境界の不一致	「寝-巻き」vs. 「寝間-着」
意味の異なる単一の形式を結びつけるか否か	「泣く」と「鳴く」を結びつけるか否か

moon + day と認識する)、形態論に属すると言われる情報を意識していないこともあるため (例: government を govern+ment とは認識していない)、現状の線引きは恣意的なものとなっていると言える。本稿は話者がどのようなリンクを発見しているかという点に一貫して着目している。いわばリンク発見一元論である。

以上のようなリンク発見の様々な食い違いは、表面化しないものも含めると、実は言語知識のいたるところに存在すると推測される。個々の話者の活動を度外視して「電子レンジという語が存在する」とか、「名詞「ねまき」は「寝」と「巻き」という2つの要素から成り立っている」などと言うことはできない。ひいては、話者から独立した一枚岩の「日本語」（「英語」、「淡路島方言」等）なる存在もフィクションなのである。

5. なぜ話者たちの言語知識は（ゆるやかに）似通っているのか：規範性とコミュニケーション

野良バリエーションの例が物語っているように、リンク発見のプロセスは個々の言語使用者が手さぐりで行う実践であるため、各人の言語の知識がことごとく食い違っていても不思議ではない。にもかかわらず、特定集団の話者たちの言語知識は、かなりの程度——少なくとも「日本語にはこれこれの語がある」などといった語り方に違和感を抱かない程度には——共通しているように見えるのはなぜだろうか。それは、人間の社会性と言語の規範性が、リンク発見ゲームのあり方と記号に対する話者の認識に大きな影響を与えているためだと考えられる。

5.1. 規範性を帯びた慣習としての言語

言語には共同体の成員によって共有された慣習としての側面がある。集団の成員はそこで受け入れられている慣習に沿った振る舞いをするのが相互に期待され、またそのように振る舞うことがその集団に属していることの証となる。そのため各人は、集団の一員として認められようとする限りにおいて慣習に従うわけである。さらに、共同体の内部の視点からは、慣習的振る舞いは単なる事実の問題としてではなく、「正しい・間違っている」という基準によって評価されうるような規範性を持つものとして認識される傾向がある¹⁴。例えば、現代日本において箸の持ち方には確立された慣習が見られるが、これは一定の割合の人がこの持ち方をするという統計的事実としてだけでなく、「正しい持ち方」や「間違った持ち方」というふうに規範的な評価を受けるものと認識されているように思われる¹⁵。

言語も、他者の模倣を通じて伝播する文化的慣習であるため¹⁶、同じように規範の力が働く。それゆえに、言語使用者の視点からは言語に「正解」があると感じられるのである。野矢（2011: 283）は、言語の使用は「正しい・間違っている」という観点から他者に評価される可能性を常

¹⁴ 慣習はなぜこの意味での規範性を帯びるのだろうか。Tomasello (2014: 88) は、慣習に従わない者は一般に集団の存続にとって潜在的に危険な存在だと判断するような集団重視の思考を人間が進化のある段階で身につけたのだと論じる。こうした規範への指向は発達早い段階で現れる。例えば、Rakoczy et al. (2008) の実験では、3歳の子供が自分の損得に直接関係なくとも「いけないんだ」(No! It does not go like this!) のような規範的な言葉で他者にルールを守らせようとする事が示されている。

¹⁵ これに対して、例えばペットボトルの持ち方にもいくつか種類があり、そこには統計的な偏りがあると思われるが、そのどれかが「正しい」と認識されるわけではないため、この意味での規範性は見られない。

¹⁶ 言い換えれば、言語記号は、文化的慣習の単位「ミーム」(Dennett 2017) として存在する(萩澤 2020、萩澤・田中 2021)。

に含んでいるという意味で、本質的に規範的な営みだと述べている¹⁷。「感慨深い」という表記に触れた時に、それを「正しい」ものと感じて受け入れ、それまでの知識を「正しくない」ものとして修正するのは、人間に備わる公共性が一種の同調圧力を与えるからである。

5.2. コミュニケーションと「役割交代を伴う模倣」

言語は単に慣習であるというだけではない。コミュニケーションという協調的行為と深く結びついた慣習である。この事実が、集団内の各話者の言語知識が一定程度共通していることのもう一つの大きな原因であると考えられる。

言語を使ったコミュニケーションは、話し手と聞き手の言語の知識が部分的にであれ一致しているとの想定に基づいて成り立つ。例えば、「ツールバーの一番右をクリックしてみて」と発話するとき、話し手は、「ツールバー」「クリックする」などの語に関する聞き手の知識が自らの知識と共通していることを（ほとんどの場合）当然視している¹⁸。もし話し手が、「ツールバー」という語を聞き手が知っているとは想定していないならば、例えば「上の細長い部分をツールバーっていうんだけど、そこの一番右をクリックしてみて」などというように、発話の形式に手を加えるだろう。つまり、会話においてある語を留保なしで使うとき、その語をあなたも知っているはずだという暗黙のメタメッセージを発してもいるのである。言語知識の基盤にある使用事象は、典型的には他者の知識との共通性を利用した協調的行為なのである。

これは、言語の習得が「役割交代を伴う模倣」(role reversal imitation)によって行われるためだと考えられる。Hurford (1989) は、言語記号は意味と形式の結びつきが受信者と発信者とは一定であるという特徴（「ソシユールの記号の双方向性」）を持つと指摘している。つまり、それぞれの言語使用者は自らが受信者として聞いた音と同じ音を発することで、発信者として同じ意味を伝えることができるということである。Bloom (2000: 75) は、この特徴が生得的な言語能力の特徴の一部であるとの考えに反対し、言語の習得が他者の意図込みの模倣であることに由来する事実であると論じている。Tomasello (2003: 27) によれば、子供が言語記号を習得す

¹⁷ 野矢はさらに、規範性は言語に不可欠な本質的特徴であると主張している。ただし本論では、言語の持つこの狭い意味での規範性は、言語を成り立たせる「集団内で共有されている」という根本的な想定（5.2節）に由来する副次的なものであると差し当たり考えておきたい。

¹⁸ 聞き手は、もしその語を知らなかったとしても、協調的行為を円滑に成り立たせるために、多くの場合「知っているていで」振る舞う。例えば、「石鹸を壁に固定するホルダーを使えば、溶け減りの心配はないよ」と発話するとき、聞き手が「溶け減り」という語を知っていることは当然視されている。初めて聞いた場合でも、多くの場合聞き手は「そんな語があるんだ」と感じながらもそれを知っていたかのように振る舞うだろう。

ただし、もちろん、話し手がその場で生産的に作った表現については、その全体を聞き手が既に知っているという想定はない。聞き手の側でも、その場で生産的に作られたと推定される句や文については「そんな表現があるんだ」と思ったりはしない。自然言語は構文ごとに生産性が異なるようになってきているが、そのことには、上記のように記憶の必要な表現単位の推定を可能にする利点があると考えられる。まだ知らない表現を耳にしたとき、それが生産性の低い構文の事例であったとしたら、共有されている表現なのだろう（だから記憶しておこう）と判断する。構文の生産性の情報がなければこの判断ができなくなる。また、このことは語という単位の存在理由の一部でもありとされる。この論点については別稿を期したい。

る際の模倣は、通常の行為の模倣とは異なるところがある。それは、行為者を他人から自分へと置き換えるだけでなく、受信者を自分から他者へ置き換えてもいるという点である。言語記号を習得する子供の立場に立ってみよう。大人が子供の注意を湯飲みに向けさせるために、[juunomi] という音を発した。それを観察した子供は、今度は、自分で [juunomi] という音を発することによって、大人の注意を湯飲みに向けさせる。このように、受信者としての自分を他者へ置き換えることが必須となる（この置き換えがなければ、子供は自分自身に向かって発信することになってしまう）。これは、言語の習得には他者も自分と同じような心の持ち主であるという理解が欠かせないということである。Tomasello は次のように述べる。

この役割交代を伴う模倣のプロセスの結果として生じるのが言語記号であり、それはすなわち、対話の話し手と聞き手双方から間主観的な形で理解されるコミュニケーション手段である。つまり、社会の中で「共有」された記号を獲得したのだと子供自身が理解することが、この学習プロセスによって保証されるのである。記号が共有されているとは、同じ記号を聞き手も理解し産出も可能だとほとんどの場面において想定可能である——さらに、聞き手側もその記号を子供と自分の双方が理解と産出いづれも可能だとわかっている——ということを意味する。
(Tomasello 2003: 27–28)

このように、子供による言語の習得は自他の同等性の理解に依存しているという事実があるため、言語記号が集団内で共有されているという想定は、言語の本質的な一面なのである。また、自らの知識を共同体の規範に合わせて修正しようとする傾向も、この想定によって生まれる。つまり、ここには「言語の知識は均質的であることになっているからこそ、実際に均質的になる」という循環的な構造がある。これこそが、言語知識が一定程度均質的である（ように感じられる）ことの一段深い理由である。

6. モノ化の原因と弊害

6.1. 言語使用者による記号のモノ化

ここまでの議論を踏まえると、言語使用者が言語記号をモノであるかのように捉えてしまう傾向の原因が見えてくる。1節で、モノ化には大きく分けて「ブロックの比喩」と「客体化」の2つの側面があると述べた。そのそれぞれに、以下のような原因があると考えられる。

第一に、語や形態素を構成する活動は、話者が内部構造を意識することなく実行可能な認知的処理の「単位」（2節参照）となっているために、まとまりとして複数の環境に生じうる。一般に活動は、異なる環境の中で実行されても「同じ」とみなされる場合、モノに見立てられやすい。例えばダンスは、それ自体としてはコトとして捉えられやすいが、例えば全体を3つの短い踊りに分け、様々な順番で実行することで新たなダンスを作り出すことを考えて、「この部分は最初に持ってこよう」などと言う場合、個々の短い踊りはモノとして捉えられやすくなるのではないだろうか。これは、短い踊りが高次レベルの構造において複数の箇所を繰り返し現

れることにより「同一の要素」とみなされる余地が生じるためである。言語記号をモノ化してしまう原因も同様である。これにより、言語記号を物体であるかのように捉えたり、複合的表現を物体の組み合わせであるかのように捉えたりする幻想（ブロックの比喩）が生じる。

そして第二に、前節で述べた通り言語記号は規範性を帯びた慣習であるために、集団内部の視点からは、個々人から独立した客観的な存在であるとみなされやすい。例えばある川が隣国との国境であるという事実は、実際には、共同体の各成員がそれを国境とみなす認識に依存した心的構築物である。しかし、内部の成員自身の視点からは、個人から独立した「客観的」事実として捉えられている (cf. Searle 1995)。言語記号も同様に、実際には各言語使用者のリンク発見活動に依存しているにもかかわらず、言語使用者自身にとっては世界の中の「客観的」存在であると捉えられている。記号を使ったコミュニケーションを成り立たせているのはこの幻想である。「この語はこれこれの意味を持つ」とか「この表現はこれこれの記号からなる」といった認識が個人を超えた客観的な事実とみなされていなければ、人は他者に対して語りかけようなどとは思わないだろう。

以上のように言語使用者にとって、記号をモノ化する幻想は、言語の性質上避けられない面がある。

6.2. 言語研究者による記号のモノ化

言語研究者も、「日本語には「箸」という語がある」とか「computer は compute と -er という 2 つの要素からできている」といった、モノ化を前提とした語り方、さらには考え方をしてしまいがちである。これは、言語研究者も言語使用者の一部であるために、上で見たような、言語使用者である限り避けたいモノ化の幻想を持ってしまうからであろう。しかしこの傾向は、言語使用者の心の探究という目的からすれば、実態の解明を妨げる有害なバイアスとなる恐れがある。

言語研究者には、辞書に象徴されるような「公式の語」の一覧が言語の中に存在すると暗黙のうちに想定してしまう傾向がある。これは 4 節で「辞書バイアス」と名付けたものである。例えば語彙の研究において、無意識のうちにそのような語の一覧を当然視して、そこに見られる構造や規則性を説明しようと試みる。しかし、辞書に記載されているような公式の語は、話者たちのリンク発見ゲームという膨大な活動の特に秩序だった一部を切り取り、客観的に存在するモノに見立てた結果である。これを当然視してしまうことは、ブロックの比喩と客体化の傾向を強化し、活動という実態を覆い隠してしまう。4 節で見た野良バリエントの例は、話者たちの言語知識が、実はそれほど秩序だっていないこと、あるいは秩序のありかたが一様ではないことに気づかせてくれる。

本稿の提案は、言語研究は話者たちの絶え間ないリンクを見いだす活動、およびそれによって形作られた言語知識の（多様な野良バリエントを含むような）動的な秩序に目を向けるべきだということである。もちろん、「日本語」「英語」「淡路島方言」といった規模で言語分析を行うことが有用な場合もあるだろう。しかし、個別言語や言語記号はあくまでも一定のレベルの

抽象化の産物だということを忘れてはならない。言語研究における混乱の多くは、メタファーを言語の本質と取り違えたことから生じているのである。

7. 結び

この論文では、言語や言語記号をモノ化する幻想を離れ、使用基盤モデルの観点から言語知識の秩序が形成されるプロセスを考察した。言語記号の「体系」と思えるものの背後には、言語使用者たちが経験の中に類似性・関連性などのつながりを見いだしていくリンク発見ゲームの過程があると主張した。そして、語の認識に関する話者間の隠れたばらつきに注目すると同時に、そうしたばらつきが、言語記号が客観的・規範的な形で存在するという幻想によって覆い隠される仕組みを明らかにした。心の探究としての言語研究は、モノ化された言語記号やその体系の存在を当然視するのではなく、その背後にある活動、すなわちリンク発見ゲームに目を向ける必要がある。

参考文献

- Benczes, Réka (2019) *Rhyme over reason: Phonological motivation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bloom, Paul (2000) *How children learn the meanings of words*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Callies, Marcus (2016) Of soundscapes, talkathons and shopaholics: On the status of a new type of formative in English (and beyond). *Language typology and universals*, 69(4): 459–516.
- Dennett, Daniel (2017) *From bacteria to Bach and back: The evolution of minds*. New York: W. W. Norton.
- 木島泰三 (訳) 『心の進化を解明する：バクテリアからバツハへ』 東京: 青土社.
- Hurford, James R. (1989) Biological evolution of the Saussurean sign as a component of the language acquisition device. *Lingua*, 77(2): 187–222.
- 萩澤大輝 (2018) 「素朴理論から見る認知形態論」 『東京大学言語学論集』 40: 21–38.
- 萩澤大輝 (2019) 「Typoに基づく語形成の考察」 『東京大学言語学論集』 41: 31–50.
- 萩澤大輝 (2020) 「語形成のそもそもを考える」 『東京大学言語学論集』 42: 41–58.
- 萩澤大輝 (2021) 「文化的技術としての語」 『東京大学言語学論集』 43: 1–19.
- 萩澤大輝・田中太一 (2021) 「ミームとしての言語—慣習性を問い直す」 『日本認知言語学会論文集』 21: 161–173.
- 影山太郎 (2005) 「形態論」 日本語教育学会 (編) 『新版 日本語教育事典』 569–570. 東京: 大修館.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based models of language*, 1–63. Stanford: CSLI Publications. 坪井栄治郎 (訳) 「動的使用依拠モデル」 坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 61–143. 東京: ひつじ書房.

- Langacker, Ronald W. (2005) Construction grammars: Cognitive, radical, and less so. In: Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.) *Cognitive linguistics: Internal dynamics and interdisciplinary interaction*, 101–159. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) Constructions and constructional meaning. In: Evans and Pourcel (eds.) *New directions in cognitive linguistics*. 225–267. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2016) Metaphor in linguistic thought and theory. *Cognitive Semantics* 2(1): 3–29.
- Langacker, Ronald W. (2019) Morphology in cognitive grammar. In: Jenny Audring and Francesca Masini (eds.) *The Oxford handbook of morphological theory*, 346–364. Oxford: Oxford University Press.
- 宮島達夫 (1973) 「無意味形態素」国立国語研究所 (編) 『ことばの研究 第4集』 15–30.
- 野中大輔 (2011) 「「いさぎ悪い」という表現を考える」 (<http://imogakusei.seesaa.net/article/238533750.html>; 2022年4月閲覧)
- 野矢茂樹 (2011) 『語りえぬものを語る』 東京: 講談社.
- Rakoczy, Hannes, Felix Warneken, and Michael Tomasello (2008) The sources of normativity: Young children's awareness of the normative structure of games. *Developmental Psychology* 44(3): 875–881.
- 三條雅人 (2015) 『ネットで見かけた信じられない日本語：うろ覚え・勘違い・言い間違い・誤植』 東京: 社会評論社.
- Searle, John R. (1995) *The construction of social reality*. New York: Free Press.
- Taylor, John R. (2012) *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford: Oxford University Press. 西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫 (編訳) 『メンタル・コーパス—母語話者の頭の中には何があるのか—』 東京: くろしお出版.
- Taylor, John R. (2015) Word-formation in cognitive grammar. In: Peter O. Müller, Ingeborg Ohnheiser, Susan Olsen and Franz Rainer (eds.) *Word-formation: An international handbook of the languages of Europe*, 145–158. De Gruyter Mouton.
- Tomasello, Michael (2003) *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge: Harvard University Press. 辻幸夫・野村益寛・出原健一・菅井三実・鍋島弘治朗・森吉直子 (訳) 『ことばをつくる一言語習得の認知言語学的アプローチ』 東京: 慶應義塾大学出版会.
- Tomasello, Michael (2014) *A natural history of human thinking*. Cambridge: Harvard University Press. 橋彌和秀 (訳) 『思考の自然誌』 東京: 勁草書房.
- 氏家啓吾・萩澤大輝 (2020) 「「思い出したように」について」 『日本語文法』 20(2): 125–140.
- Ujiie, Keigo and Hagiwara Daiki (in preparation) A dynamic view of linguistic signs: Morphemes in Cognitive Grammar.
- Wittgenstein, Ludwig (1953/2009) *Philosophical investigations*. Revised 4th edition by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte. Malden, MA: Wiley-Blackwell. 鬼界彰夫 (訳) 『哲学探究』 東京: 講談社.

Aspects of Link-Forming Activity: Beyond the Illusion of the Objective Existence of Linguistic Signs

HAGISAWA Daiki and UJIE Keigo

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp keigo5525@gmail.com

Keywords: cognitive linguistics, usage-based model, linguistic knowledge, sign, normativity, link-forming activity, wild variant

Abstract

Language and linguistic signs are often conceptualized as entities that independently exist “out there.” Departing from this illusion of reification and taking the usage-based theoretical perspective, the present article examines how cognitive activities create and maintain systematicity in linguistic knowledge. Our central claim is that behind the apparent “system” observed in linguistic signs lies a process where language users find and form links based on similarity and association in their experience (dubbed as the “link-forming game”). We also argue the following: (i) this activity is carried out at the individual level, yielding personal idiosyncrasies in lexical knowledge, (ii) it is at the same time founded on conventionality and normativity, and (iii) the illusory sense of objective existence of linguistic signs is created by a group of factors, making elusive the link-forming activity.

(はぎさわ・だいき 神戸市外国語大学大学院 うじいえ・けいご 東京大学大学院)